

● シリーズ 私の見た日本 Vol.213

## 夢を叶えてくれた日本の多様性

エンケ ホルワ

中国・内モンゴル自治区生まれ。2022年名古屋工業大学大学院工学研究科社会学研究科博士後期課程修了、同年伊藤建築設計事務所にて非常勤入職、2023年八戸工業高等専門学校環境都市・建築デザインコース助教として採用



## 日本の最初の印象

日本という国名は、モンゴル語で「ナラン・ウルス（太陽の国）」とも呼ばれることがある。この表現は日本の「日」に対する直訳であると同時に、モンゴル人が同じく相撲が大好きな日本に対して抱く特別な感情を映している。内モンゴルは中国の北部に広がり、ここは昔からモンゴル人が住んでいた地域である。満州国時代から、日本との関係は深くなり、モンゴルの知識人たちは中国人同様、日本へ留学し、新たな知識、思想、技術を学んできた。彼らの努力により、世界の進歩に比べて取り残されていたモンゴル地域に新風を吹き込み、日本の支援を受けながら民族救済の運動を進めていった。

その象徴的な例として、「フフ・トグ新聞（青旗報）」というモンゴル語の新聞がある。この

新聞は日本の状況を詳細に報じ、当時のモンゴル人に日本の発展を伝えていた。それは、モンゴル人に日本を理解する最初の機会を提供したともいえる（写真1）。新聞では政治や世界のニュース、新技術や知識だけではなく、モンゴルと同様に日本でも仏教が信仰され、古くから数多くの寺院が存在しているという文化的な共通点も報じられた。これにより、古い思想に囚われていたモンゴル人たちは新たな世界のビジョンを見つけた。

そして1985年以降、日本と内モンゴルの友好関係は新たな展開を見せた。中国が改革開放政策を推進し、日中関係が緩和されたことで、一般の人々が日本へ留学することが可能となった。その結果、内モンゴルからも多くのモンゴル人が日本に渡り、知識を伝える役割を果たすようになった。

日本に渡ったモンゴル人たちは、モンゴル語の教科書にも日本に関する話を加えるようになった。私が子どもの頃に印象的だったのは、モンゴル語の教科書で「昔のモンゴル人が太陽の昇る東へ向かい、最終的に日本に辿り着いた」という話が語られたことだ。その話を通じて、日本は物理的には遠い存在かもしれないが、心理的には近い存在であると感じ、日本を訪れてみたいという強い願望を抱くようになった。これも最初の文章で述べたように、多くのモンゴル人が日本に対して特別な感情を抱く理由の一つではないかと考えられる。

## 日本に来るきっかけ

子どもの頃に心に植えた種が大学2年生の時に芽吹いた。2012年に交換留学生として日本の三重大学で建築を1年間学んだ。美しい自然に恵まれた三重県津市で過ごすなかで、その地域特有の自然と文化が日本の建築にどのように影響を与えているかを学んだ。

神社仏閣や古民家が持つ静けさと美しさ、独特の構造や意匠、そしてそれらを維持するための伝統的な建築技術、それによって形成される人々の生活様式や思想が新たな視点を提供してくれた（写真2）。2012年に初めて日本に来て、短い1年間ではあったが、語順が同じであるため、一つの語族とされる日本語とモンゴル語の共通点を理解するだけでなく、日本の文化や建築についても多く学べた。私は土木専門分野を学んでいたが、これがきっかけで、卒業後は日本で建築を学ぶことを決心した。

## 日本での進学および就職

2016年から名古屋工業大学で7年間、研究生から修士課程、そして博士課程へと進学した。さらに、名古屋に位置する伊藤建築設計事務所でも1年間学んだ。津市で感じた自然との共生とは一転、名古屋では近代的で先進的な都市建築を目の当たりにした。鋼鉄とガラスによって形成される高層ビルが林立す

る大都市名古屋のスカイラインは、日本の建築が未来へと進化し続けていることを物語っていた。

建築設計事務所での経験は、建築が単なる物理的な構造ではなく、社会や文化、人々の生活を豊かにするためのツールであることを強く認識した。そして、建築家として一般の人々に最適な提案をわかりやすく提供することが、どれほど社会や建築技術が進化しても常に変わらない使命であることを理解した（写真3）。

また、2023年、私のキャリアは新たなフェーズを迎えた。日本本州最北端の青森県、八戸市の八戸高専で建築専門の教員として働き始めた。ここで日本の新たな都市問題や建築が自然環境とどのように対話し、それを反映しているかを新たな視点で認識し始めた。今まで都市化が進んできた八戸市は人口減少、少子高齢化、都市のスラム化など複数の問題が重なり、今までの都市計画と異なる新たな計画が必要とされている。それでも、厳しい自然環境に耐えながら美しく持続可能な生活を営む地域の人々の知恵と工夫が反映された建築は、私にとって新たな発見だった。例えば、「八戸市美術館」は都市全体の活性化に寄与し、耐震防災機能や展望台を備えた市役所別棟は市民の安全と生活の質を向上させている。また、雪と寒さに強い「八

戸まちなか広場 マチニワ」は、多目的な交流と創造の拠点として都市の活性化に寄与している。これらの現代建築を読み取ることを通じて、建築が耐震防災、安全安心で豊かな地域や都市発展に果たす重要な役割を深く理解することができた。また、東日本大震災の津波被害について学ぶことができる「八戸市みなと体験学習館」、地域資源を守りつつ活用する方法について学べる「種差海岸インフォメーションセンター」などの施設でも、津波被害や地域資源保護といった環境問題を意識することの重要性を伝えられている。

学生時代には建築構造を学んでいたが、日本に留学後は、近代的な大都市である名古屋で建築計画に関する技術を学んだ。さらにその理念や経験を活かして、モンゴルの仏教寺院建築に関する研究調査を行い（写真4）、日本で学んだからこそモンゴルの建築をより客観的な視点から分析し、研究することができた。また、建築設計事務所における第一設計現場の仕事でも、建築計画に関する実践的な経験を重ね、建築を通じて日本を見ることができた。以上の経験は、日本の文化や歴史を理解することができ、さらに自分の生まれた地域の当たり前のことも、より多角的な視点から見直すことが可能となった。これらの経験と知識を学ぶ日本の旅では、私が建築の美と機能性、そしてそれが人々の生活や社

会にどのような関係を持っているかを理解する基盤を提供した。

## まとめ

津市での静寂と自然、名古屋での近代性と革新、八戸での厳しさと持続可能性。私がこれらの地で経験したことは、建築が単なる物理的な存在ではなく、それぞれの土地と文化、人々の生活に密接に結びついていることを強く印象づけた。これらの経験は私の視野を広げ、建築が持つ可能性について多角的な視点から考えさせた。私の見た日本は、その建築で、変化と恒常性、創造性と伝統、自然と人間の関係性を強く体現していると感じた。一見矛盾しているように思えるが、それぞれが建築の魅力で、私が日本で受けた印象だ。日本の建築が持つ独自のバランス感覚、美的感覚、そして生活を形成する力は、私に深い影響を与えた。私が見た日本は、建築を通じて文化を創造し、人々の生活を豊かにし、社会と自然環境との調和を保つ場所だった。これらの経験は私の建築観を形成し、これからのキャリアにおいても私の道しるべとなる。これまでの日本滞在は、成長と自己の発見の場であり、その独特な建築の魅力と深さに引き込まれ続けている。



写真1 日本の神社と寺院の紹介した「フフ・トグ新聞」



写真2 三重県「夫婦岩」の伝統的な建築



写真3 名古屋駅の近代的で先進的な都市建築



写真4 日本における古建築の実測調査中